日本の和とバハイの和

林彬子

日本は、「和」の国であると自ら言うように、常に和を保つことが大切にされてきた。一方、バハオラの最終目標は人類に和をもたらすことにある。そこで、日本の和についてその歴史的背景、特徴、実態について考えてみた。日本型「和」社会は、表面的には非常に平穏で、秩序だっているが、その裏で、統治のための政策に利用され、人々は抑圧され、言動が制限され、周りと同じように行動する習慣が身についた。個は集団に埋没し、個性は否定された。反面、伝統を重んじることによって、独特の文化も発達した。「和」は、秩序を保つ方便の一つだった。バハイの和は、高い精神性と道徳性を身につけ、能力を最大限に伸ばしつつ、世界的機構によって全人類に和をもたらそうとするもので、日本の和とは大きく異なる。今の日本は、伝統的「和」社会が崩壊しつつあり、社会に不安が広がっている。これからの精神的支柱として、バハイを取り入れていくことが最善と思われる。

緒言

日本においては、「和」は、有史以来今日にいたるまでもっとも重要な美徳である。「和」は、島国日本の地形的、気候的条件の下に、多くの人手が必要な農耕をするために古くから発達してきたといわれている。今でも、人里離れた山村では昔ならの村社会があるが、日本人が集うところでは、常に「和」を図ることが優先される。

奈良時代、聖徳太子(574-622年)は、17条の憲法の冒頭に「和をもって尊しとなす、逆らうことなきを旨とせよ」と規定した。以来「和」という言葉は、絶対的なものとして1,400年たった今なお、日常的に生きている。「和」の概念は、儒教として中国から移入されたものであるが、中国や朝鮮では個人の徳を高めることが大切であり、思いやりの美徳である仁が尊ばれ、日本ほどには「和」は強調されなかった。聖徳太子は、仏教に深く帰依し、「和」を達成するために、仏法を敬い、礼を重んじ、高い道徳性を身につけるように述べた。太子亡き後、権力闘争が激しくなり、太子の一族は、和を保つために自害し、血統は絶えてしまう。

その頃、日本は、中国や朝鮮によって倭国と呼ばれていた。「倭」という字には、背中が丸い背丈の低い人というあまりよくない意味があった。そこで元明天皇の時(700年頃)、「倭」の音をとって「和」という字を当てはめて、自らを和国と呼ぶようにした。さらに、もっと大きな和の国になるよう「大和」と書いて「やまと」と読むようにした。

民が従順で和していれば、政治を行うことがたやすくなる。奈良時代の律令制下(7-10世紀)には五保という制度があった。これは中国の制度を真似たものであるが、近隣五戸で構成され、納税、防犯の連帯義務を負うものであった。民は相互に援助し合うばかりでなく、自分に不利益が及ばないようお互いを監視しあったことだろう。江戸時代には五保を真似た五人組が作られ、権力に都合のよい「和」はさらに強化された。また、人々には、地形的に移動しにくい地域に限らず、社寺参詣、療養湯治以外に移動の自由はなかった。これも政策上都合のよいことであった。

中世以降、仏事や神事を行うための結社である、念仏講や庚申講などが近隣の回り持ちで執り行われていたが、深い宗教的意義のあるものではなかった。「和」社会には、神道的伝統はあるものの、太子が目指した精神性は薄れてしまい、人々にとって、「和」集団の規範に従うことが生活のすべてだった。

第二次世界大戦中の隣り組は、戦意を高揚し、言論を統制する上で大きな役割を果たした。人々は集団からの孤立を恐れ、集団の大勢に従ったこの制度は、まさに国家統制にはうってつけだった。

このような権力による強制が日本の「和」の特徴を増進させたと考えると、その特徴が理解しやすい。「和」社会は一見、平穏で秩序があり、理想的に見えるが、人間性が抑圧され、人々には諦めと忍従があったのではないか。例えば、大和撫子といえば、従順で、奴隷のように尽くす日本女性のことであったが、自分を殺して尽くすことを強要された惨めなもので、人権が無視されていた。他の人々も、程度の差はあれ、同じように忍従を強いられていたのではないか。
「和」は正義であり、時に正義を超えるものだった。集団を守るため「和」に堕すことがある。（例、福岡で、判事の妻の犯罪を検事がもみ消そうとした。これは組織ぐるみで身内の非を隠そうとしたもので、このような身内意識はいたるところで見られる。「和」を一言で言うならば、秩序を保つための1方便ということではないか。
日本型集団主義と呼ばれる「和」社会は、受動的、消極的、閉鎖的、現実的であり、人間関係を制約するさまざまな特徴を持つ。個を尊重し、契約に基づいて行動する西洋とは大きな違いがある。
バハイの和は、個人の精神性を高め、新しい価値観を育て全人類の平和共存を築いていこうとするもので、積極的に理想を実現しようとするものであり、日本の和とは質や規模が大きく異なる。
今なお、「和」の状況を表す言葉が生きており、日本人ならばそれらの言葉を見ただけで、実態が理解できるので、それらの言葉をキーワードとしてあげた。

「和」社会に見られる特徴

日本人の特徴：キーワード＝まじめ、刻苦勉励、ブーム、涙の文化、ウエット、匠、職人芸、わび･さび

日本人の特徴を研究した本も多いようであるが、自分の観察から見ると、日本人は一般的に、勤勉、温和、繊細、質素、辛抱強い、内気、閉鎖的、排他的、同質的、平均的、非社交的である。また、主体性がなく、熱しやすく、冷めやすく、大勢の人が一斉に同じ行動をする集団ナダレ現象が起きやすいといわれている。また,慎み深く、情緒的で涙もろいが、忍従と諦めを秘め、感情を素直に表せず、悲しみを共感しているのではないか。
手工芸品の完成度の高さに職人技が冴えたしめやかな激情が見られる。閉ざされた社会の中で、技を磨くことによって創造性、個性を発揮し自己実現を計ったのではないか。また色彩の好みも、日本的な渋いものが多く、原色を好む中国や朝鮮とは違っているようだ。
日本人全体が器用で、完璧を目指そうとする傾向があった。こうした日本人の特徴は、「和」集団の規制力が大きく影響しているのではないだろうか。

世間、世間体：キーワード＝世間をはばかる、世間体が悪い、世間の笑い者になる、世間に顔向けができない、気がね、恥、世は張り物、秘密主義、座敷牢、人目をはばかる、人並み, 横並び

日本の社会では、自分の周りの世界である世間にどう写るかが大問題である。したがって、世間に気兼ねし、何かにつけて目立たないように振る舞い、世間を拠り所に恥ずかしくないよう行動し、世間から孤立することを恐れた。全てにわたって世間並みに生きようとし、世間並みに達していないことを恥じた。このように常に世間体にとらわれて生きている。
その反面，狭い集団の中で見栄を張り合い、生活の実態とかけ離れた派手な冠婚葬祭をしたりする。最近は、見栄を張らなくなってきたが、「和」社会の規制が弱まってきたことを示しているのではないか。
世間体を重んじ、都合の悪いことは外部に漏らさないよう隠し、外見を繕うことに気を使う。普遍的な価値基準を持たなかったので、世間の基準から逸脱しないように自

己規制して生きている。このように世間体こそが日本人の行動原理である。
　西洋のような、唯一絶対神に対して自己規制を働かせ、自我を確立させた自律性のある個人からなる社会とは大きく異なる。

他者志向型、あるいは体制追随型社会：キーワード＝小異を捨てて大同につく、集団帰属性、同調性、隣り百姓、事大主義、ことなかれ主義、八方美人、長いものに巻かれろ、不和雷同、変わり身の速さ,触らぬ神にたたりなし、面従腹背、御都合主義、下克上、氏より育ち

　集団の中に自己を埋没させ、個が確立しない。周囲の人々の動きを注意深く伺いながら、自己の行動を律していく。自分の考えがなかったり、表せず、自分の意志を集団の意志に併せ, 突出を嫌う。個性的であるよりは和を保てるほうがよいと考えている。勢力の強いものに追随して自己保身を図る態度や傾向がある。創造性、友情、指導力は、集団の秩序を乱しかねないので否定されがちである。また、目覚しい人の足を引っ張り、成功を喜ばないことも多い。変わり身が速いのは、強制された和であるため、簡単に優勢なほうになびくためである。
　日本人は独創性は弱いが改良が上手であるといわれるが、このことはこれらの状況から生まれてきたものではないか。総中流意識ともいえる平均化志向を持ち、誰でも機会さえ恵まれれば、それなりの成功を収められるとお互いに思っている。世が世ならば、という言い方をする。
　身分違いの結婚の場合には、地位の高い人の養子、養女にして地位を上げ、形を整え、正当化する。ということは階級意識もそう強くないことを表しているのではないか。

義理と人情：キーワード＝恩と恩返し、人情、恩義を受ける、恩義に報いる、義理のしがらみ、恩を売る, 身内意識、義理を立てる

　日本社会では、義理と人情が強調されてきたが、これは倫理性の代役を果たすものだった。何かをしてもらったり、情けをかけられたら、お返しをする。義理のためには不正にも目をつぶったり、人情より優先させてしまうこともある。義理を欠くことは非常に悪いことであったが、後々の利益のために恩を売っておいたり、道徳性よりは利害に重点が置かれているとも言える。
　今の人は、義理に縛られることが少なくなり、ドライになったといわれているが、今なおウチ社会の利益を守るために、不正に目をつぶり義理立てる事も多い。

犯罪の防止：キーワード＝罪は九族に及ぶ、村八分、けんか両成敗、事を丸く収める、事を穏便に済ます、旅の恥はかき捨て、人を見たら泥棒と思え

　人々は、世間から後ろ指をさされないように行動を慎み、親は子に絶えず悪いことをしないように教えた。犯罪を犯すと、影響は末代に及ぶと恐れられ、一族に迷惑がかかることを思い犯罪を起こせなかった。
　争いは双方に非があるとする。争いを起こすと、自分にも不利益が及ぶので、自分が悪くなくてもすぐ謝り、事を荒立てないようにする。人々は集団の規範に従うことを強制され、このことは、犯罪を未然に防ぐ上で効果があった。集団の中においては道徳的であるが、集団の外では道徳的でない。このように普遍的な価値観に基づいた道徳ではなく、集団の規範に適しているかどうかが善悪の基準となる傾向がある。要するに、自己との人間的なつながりに重きが置かれている。日本は世界一安全な国といわれたほどであったが、現在は「和」の規制力が弱まり、犯罪が急激に増加している。世界には、犯罪を犯したものを厳罰に処して、見せしめにした国もあったが、どちらがよいのであろうか。

行動の使い分け：キーワード＝ウチとソト、ウチワ、ミウチ, ナカマウチ、甘え、もたれ合い、仲間意識、内面･外面、日本型経営、タテ社会, ヨソ･ヨソモノ、いじめ、嫁いびり、本音と建前

日本人はウチとソトを使い分ける。ウチは家であり、ウチにおいては個人の区別が消滅し隔てなき間柄として個人間に強い一体感、連帯感があり、人間関係はウチの内部で閉塞し、ソトなる世間と隔てられている。ウチの中では,甘え,もたれあい,情緒的である。

ウチの意識は自分の所属する集団にも拡大され、ウチの学校、ウチの課、ウチの会社というふうに広がり、さらに国家にまで広がる。ウチへの強い所属感はソトの集団に対する無関心や敵意を招く一方で、ウチ集団の連帯感を強める。

ソトのものを、ヨソとかヨソ者といった言い方をし、異質なものとして排除する。いじめは和社会ではひどかった。表面的平穏さとは裏腹に、陰湿な面があったのではないか。たてまえに従うが、本音は別なところにあることも多い。

集団無責任体制：キーワード＝後は野となれ山となれ、事をうやむやにする、詰め腹を切らせる、つまはじき

責任の所在をはっきりさせないことが多い。誰に責任があるのか分からないような決定の仕方をする。問題を先延ばしにし、時間が解決してくれるのを待つ。意見に反対であっても、周りの雰囲気に押されて一致させるよう、折れたりして何となく満場一致のようになる。したがって,問題が起きても責任を強く追及することはできない。意見が一致し難いときには先延ばしにし、何事かあったときに反対者を排斥してしまうこともある。

意思決定：キーワード＝根回し、談合、なれあい、沈黙は金、物言えば唇寒し、小田原評定、出る杭は打たれる、見て見ないふり、外圧

何かことを決める時には根回しをしたり、利益を分け合う談合をする。あらかじめ事が決められていて承認だけが求められることも多い。

自己主張をしてはいけないと思っている。または、自己主張すると不利になったり、責任を取らされると思い, 意見を出さなかったり,はじめから自分の意見を持たないことも多い。人が意見を出すことを牽制する。少数派になることは、孤立することになるので、大勢に従うことが多く, 従って改革は起きにくい。問題があっても、解決の方向に動き出さない事が多いが、外圧があると急に取り上げられたりする。

これらの問題を解決するには、まさにバハイの協議の精神を取りいれることしかないのではないか。

コミュニケーションの取り方：キーワード＝察し、以心伝心、目は口ほどにものを言い、腹芸、うそも方便、あたりさわり、暗黙の了解、なあなあ、あうんの呼吸

日本におけるような濃密な人間関係の中では、コミュニケーションの必要が少なく、また, やたらなことを口にしたり、自己主張したりできないので、他の伝達手段が発達した。相手の気持ちを察し、言葉に出さずにお互いを理解することも多い。

「腹の探り合い」、「腹の内がつかめない」、「分からない」、「読めない」といったように、相手の思惑を探ろうとする。また、顔を立てたり、顔色をうかがったりする。相手を傷付けないよう、独特の断り方をする。否定なのに肯定的返事をしたり、あいまいな返事をして角を立てないようにする。

酒を媒介にして本音を言う。後であれは酒の上でのことと言い訳をするが、本音が伝わったことを期待する。

暗黙の了解で事が進む。事がよくない結果に終わった時、そういうことではなかったと言い換えてしまう。なあなあで事が進み、うまくいかないことが分かっても、責任を取

ったり,評価、反省することも少ない。

まとめ

このように、日本の和はいろいろな面で曖昧さを伴い,非常に現実的、便宜的なものである。人々は真の精神的価値に基づいて行動しているのではなく、長い間、集団の規制力によって支配されてきた。ともかく一応の道徳は存在し、宗教がなくとも世間に従っていけば生きていかれた。この事が、日本人の宗教に対する警戒感、殊になじみのなかった西洋的一神教に対する警戒感、あるいは、必要性を感じない無関心の原因の一つとなっているのではないか。

農業が機械化されるにつれ、濃密な人間関係や義理や人情も廃れ、農村の和も大きく崩れてきた。人口が都市に集中し、家族は核家族化し、人々は徐々に和の呪縛から開放されつつある。その結果、犯罪、非行も増加し、社会に不安が広がりつつある。しかし、今もなお集団の利益を守るために和が重視されている。若者を中心に表面的には個性的になってきたが、職場でも、学校でも、自分の意見は出さず、討論が成り立たないことも多い。言われたことしかやろうとせず、責任を負わされることを嫌う。個人主義を履き違えた自己中心的な態度が目に付く。

最近は、教育現場でディベートの訓練が取り入れられてきているようだが、文化的背景を認識し、もっと根本的なところから変えていかなければならないのではないか。「和」の規制力は依然として強く、一部の人たちの思惑で、人々の願いとはかけ離れた、思わぬ方向に向わされる危険性を常にはらんでいる。これからは過去の伝統の良いところを残しつつも、個人がしっかりした考えを持ち、軽薄に付和雷同しないようにならなければならない。自分の頭で、真理を勉強することによって正しい精神性を身につけ、自己を確立し、意見を出し合い、他人の個性を尊重し、間違った考えに追随しないようにしなければならない。

周りの人と同じように行動するという日本人の特性も、視野を広げ新しい考えを取り入れることによって良い方向に少しずつ変えていく事も可能ではないだろうか。人間は、正しい型をはめられていないと、間違った方向に行ってしまう可能性がある。世界が平和共存に向おうとしている今、人類の多様性を認めつつ、和合していこうとするバハオラの精神性を取り入れ、バハイの原則を実現していくことが、日本の進むべき道ではないだろうか。